

「介護者への支援」は誰のため？

息子介護者とケアマネジャーの支援ニーズ認識の乖離

東京都健康長寿医療センター研究所
日本学術振興会特別研究員 ○平山亮
北海道大学 小川まどか

【目的】本研究の目的は、高齢の親の主介護者である男性（息子介護者）と、その支援者のあいだで、支援ニーズの認識の乖離がどのように生じるのかを検討することである。

家族構造の変化や就労の不安定化を背景にして、息子介護者の数は増加している。一方で彼らのなかには、客観的には支援が必要と思われる状況にありながら、本人にはそのような認識が希薄で、支援者の介入を拒否する者もいることが指摘されている。

そこで本研究では、息子介護者本人と、その支援者のひとりであるケアマネジャーそれぞれにインタビューを行い、それぞれが介護状況をどのように記述し、それにもとづいて支援の（不）必要性をどのように説明しているのか、特に両者の説明のしかたの違いに注目して比較分析した。

【方法】関東地方の都市部・地方部を中心に、複数の居宅介護支援事業所を通じてリクルートした息子介護者5名と、その担当ケアマネジャーに対し、それぞれ個別に半構造化面接調査を行った。息子介護者の年齢は、40代後半から50代前半が中心で、1名を除いて親と同居していた。調査は、息子介護者のサポート・ネットワークに関する研究の一環として行ったため、インタビューの内容は多岐に渡ったが、本研究では、息子介護者、ケアマネジャーそれぞれによる必要／不要な支援についての語りの部分に焦点を当てて、インタビュー逐語録の内容分析を行った。

【結果と考察】必要な支援（あるいは不要な支援）とその理由についての説明は、息子介護者の置かれた状況によって様々であった。ただし、「助けは要らない」という息子介護者は、「介護者への支援」の目的についての理解が、ケアマネジャーと異なっていることが示唆された。

「助けは要らない」息子介護者は、支援が不要な理由を、自分自身のニーズに即して説明していた（例えば、家事ができないことを認めつつも、だからといって“自分が”生活する上で困っているわけではないから、など）のに対し、ケアマネジャーは、その息子に、要介護者である親の介護ニーズを満たす能力があるか、という観点から、支援の必要性を判断していた。

つまり、前者は、「介護者への支援」の対象を、介護者である自分に限定して理解している（だからこそ、自分が「不要」と思えば、支援の受け入れに消極的になる）。一方、後者は、息子介護者への支援を通じて、その親の生活を維持することを目的としている。言い換えれば、ケアマネジャーにとって「介護者への支援」の対象とは、介護者である息子だけでなく、究極的には、要介護者である親も含む。支援対象についてのこのような理解の違いが、支援の必要性をめぐる両者の認識を乖離させる一因となることがうかがわれた。

【示唆】息子介護者が「助けは要らない」というとき、自分が支援を求めないことが、要介護者である親の生活に及ぼす影響が視野に入っていない場合がある。一方で、彼らへの支援が“介護者への”支援という名のもとに行われる限り、当の介護者である息子の認識や論理によって、その支援が斥けられてしまうことも事実である。介護者への支援を経由して、要介護者の介護ニーズを満たす試みは、挫かれる可能性がある。介護者である息子への支援と、要介護者である親への支援は、区別される必要があるだろう。